

本保陣屋の調査研究（6）

陣屋から県庁へ

吉 田 純 一

Study on the Honbo-jinya (6)

From the jinya in Edo period to the prefectural office in Meiji

Junichi YOSHIDA

Honbo prefecture office which existed only fifth months during forth Meiji had about 2,092 tsubo (1tsubo = 3.3m²) in area. The main gate was east side of the south part and the goverment office was back of it.

This prefectural office succeeded to the Honbo-jinya of Edo period but the area was wider in the north. The goverment office and the main gate were rebuilt of the building of jinya and used, but three public residences, the side gate and a prison were bult newly.

1) はじめに

本保陣屋は江戸時代、越前国内に存在していた幕府領を統治していた代官所であり、丹生郡本保村（現在の武生市本保町）に置かれていた。享保6年（1721）、間部家が西鯖江に入部したため、その地にあった鯖江陣屋に代わって新設されたのが始まりである。その後いったん廃止された（元文元年～寛保3、1736～43）が、延享元年（1744）に再び設置され、それ以降は明治初頭まで120余年にわたり存続した。明治に入ると、同3年（1870）12月に本保県が成立し、旧陣屋の旧支配地と福井藩に管理を預けていた幕府領を含めた300余カ村、13万1,000石が本保県の所管となった。そして翌4年（1871）正月、小原忠寛（大垣藩大参事）が本保県権知事に命じられ、と同時に旧陣屋を県庁とすることが決められた。ところが旧陣屋をそのまま県庁として使うには手狭であったために、敷地を拡張したり、建物を新設・増改築したりして県庁として整備がなされたという（註1）。

これまでに江戸時代の本保陣屋については絵図などの諸史料にもとづいて報告した（註2）が、県庁の詳細は明らかなではなかった。というのも本保県は明治4年11月、福井県に統合されて廃県となったため、県庁は同年7月の開庁からわずか5カ月たらずで閉鎖された。しかも閉鎖と同時に庁内の諸建物は周辺地域の有志家に競売され、取り払われてしまった（註3）。こうした状況が県庁に関する史料を残りにくくし、そのために実態もつかみにくかったのである。ところがこのたび幸運にも本保県庁の図がみつき、具体的に本保県庁の様子を知ることが可能になった。

本稿はこの図を紹介するとともに、おもに敷地と建物に注目しながら本保県庁の様相を解明し、さらにすでに紹介済みの『本保陣屋絵図』と比較しながら陣屋から県庁への整備状況について考察してみたい。

2) 本保県庁の様相

(1) 『本保縣廳之圖』

図-1はこのほど新たにみつかった本保県庁の図である。神戸市在住の河野治郎氏が所有されているもので、『本保縣廳之圖』との内題があり、南北75.5センチ、東西49センチの大きさである(註4)。後述するように敷地や建物についても旧本保陣屋との関連がうかがえ、江戸時代の陣屋から引き継がれた県庁の様子を描いていることは明白である(以下では『県庁之図』と略称する)。注記にあるように3分7厘5毛計、つまり1間(6尺)を0.0375尺とするから縮尺はほぼ160分の1になる。この図がつくられた時期はわからないが、県庁への改修に際して作られたものと考えることができよう。なお左上端の「明治四辛未年正月創、同十二月廃」とある注記は本保県庁の設置と廃止時期を示すものである。

(2) 敷地について

図によると、県庁は東側を正面とする南北に長い敷地をもち、南半部が西側で膨らんだ形状をしている。そして四周に堀(図では群青色で示されている)を廻らし、東辺と北辺にはこの堀に接してほぼ1間幅の道(図では赤色)が取り付いている。東辺には2筋のアプローチ道がある。南側の道は正門に至るメインのアプローチ道で、幅は3間、北側には「腰掛」も備えられている。北側は2間幅で、「通用門」に向かう通路である(註5)。

後掲の『本保町有史料』の敷地図(図-3)からこの敷地の大きさがわかる。それによると、南北方向は西辺が56間5分、東辺が53間、東西方向は南辺で37間1分、北辺が26間8分5厘であり、図の縮尺から換算してもこれに近い値が得られる。そして堀に囲われた敷地の総坪数は、1890.2坪と算定される(註6)。

(3) 建物について

庁内には比較的規模の大きい建物が5棟ある。このうち南半部のほぼ中央にある建物(a棟)が最も中心となる庁舎であろう(ここでは政庁と呼ぶことにする)。東、北、西の3方に延びた複雑な間取りをもつが、延べ間数は南北18間半、東西20間半である。その前方の東辺にたつ建物(b棟)は県庁の正門に当たる。間口2間半の門(出入り口)を中程にもち、その両脇に数室の部屋が配されていて長屋門の形式をとっている。

北半部には3棟の建物(南から北へ順にc, d, e棟とする)が並んでいる。南北方向はいずれも4間半で、東西方向はd棟とe棟が25間半、c棟はその半分となっている。間取りはいずれも同じ形式を繰り返している。たとえばc棟は中央の逆コの字形の板敷き部分で折り返すと左右の間取りは全く同じになる。d棟とe棟はこれがさらに倍になっている。したがってこれら3棟は同形式の間取りを繰り返す、今日のアパートに類するもので、県庁に勤務する役人用の官舎とみてよからう。

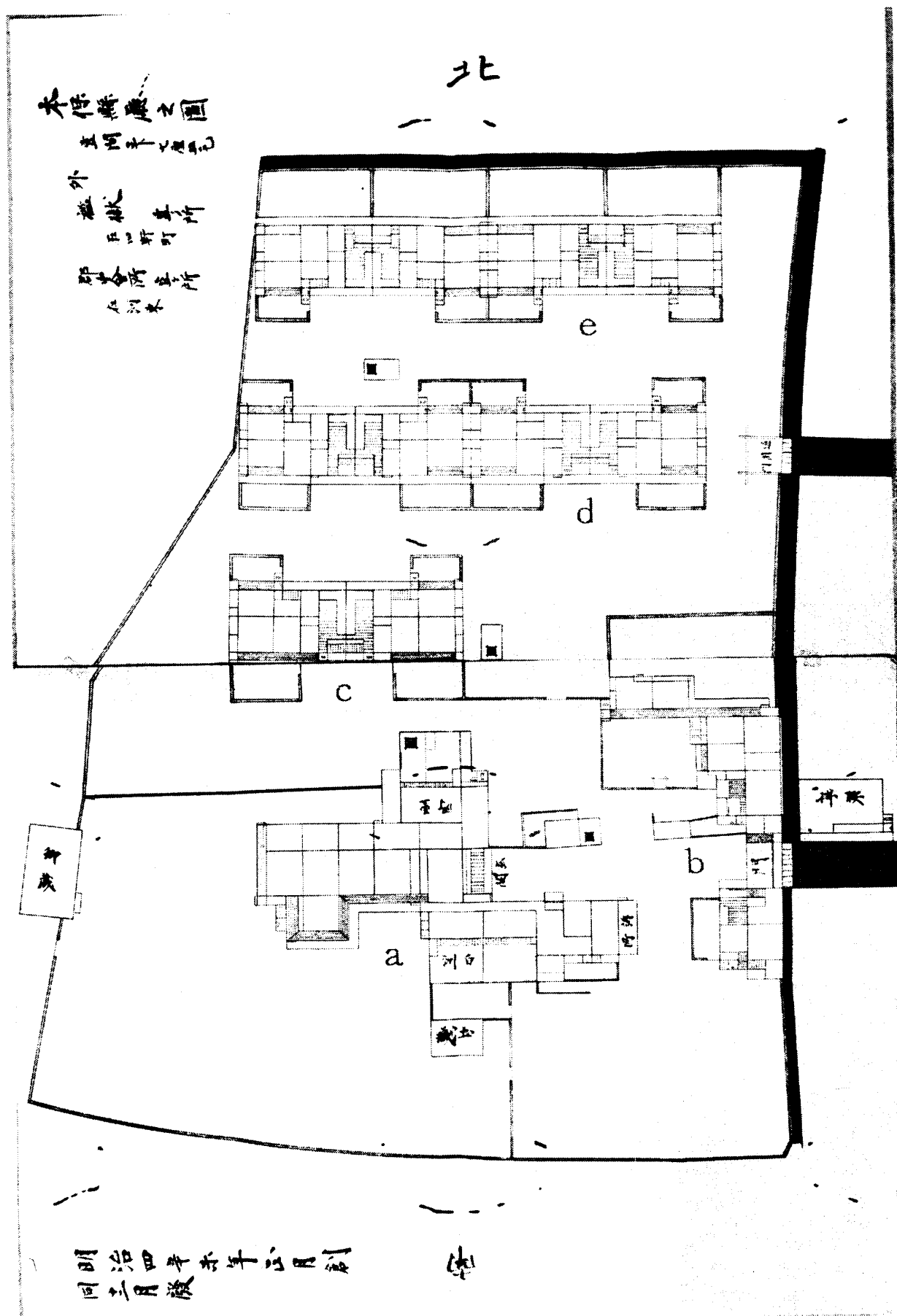


図-- 1 『本保県庁之図』（河野治郎氏所蔵） 75.5 × 49 cm

このほか南半の西奥に堀からはみ出す形で「御蔵」があり、a棟の南には「土蔵」もみられる。また東辺北よりには前述したように「通用門」が設けられている。

なお図の注記にもあるように県庁の建物としてはこのほかに「檻獄」と「郡中會所」があるが、前者は「在四軒町」、後者は「在河東」とあり、この敷地とは別の場所に設けられていた。

3) 本保陣屋との関連

(1) 陣屋の概要

本保陣屋の敷地や建物の具体的な様子は図-2に示した『本保陣屋絵図』（以下では『陣屋絵図』と略称する）によって明らかである。この図は本保町に保管されていて、内題に「大原亀五郎御代官所、越前国丹生郡本保村陣屋絵図」とある。年紀は記されていないが、大原亀五郎が飛騨郡代を務め、その支配下にあった本保陣屋の代官を兼務していたのは天明元年（1780）から寛政元年（1789）であり、ほぼ1780年代ころの陣屋を描いた絵図とみなすことができる（註7）。つまり本保にはじめて陣屋が置かれてから60余年後、延享度の再営からは40年ほどたったころの様子である。

敷地は北東隅の一画が欠けているが、東西が42間（南辺）、南北が40間（西辺）とある。敷地のほぼ中央に東、北、西の3方向に延びる複雑な平面をもつ建物（A棟）があり、その東前

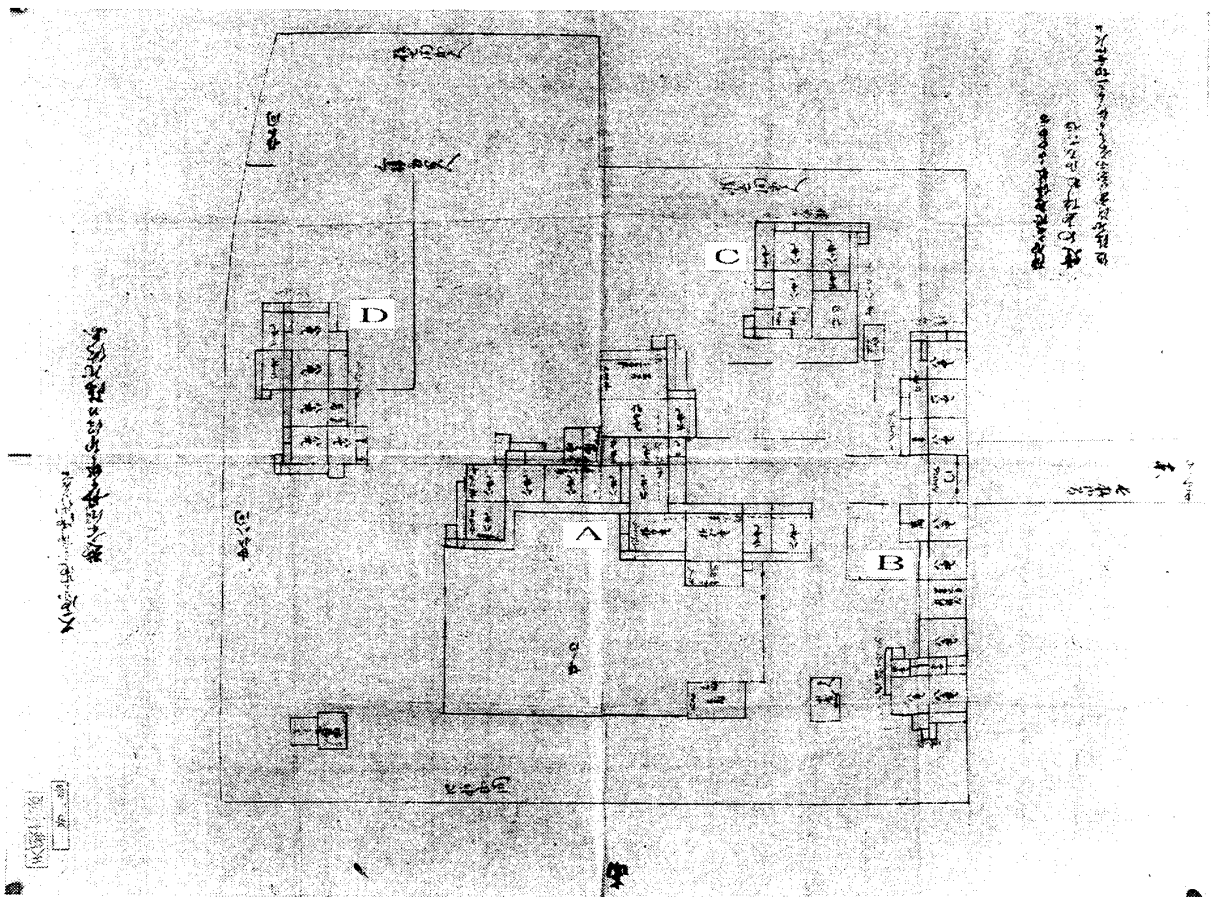


図-2 『本保陣屋絵図』（本保町有史料） 58.5 × 76.5 cm

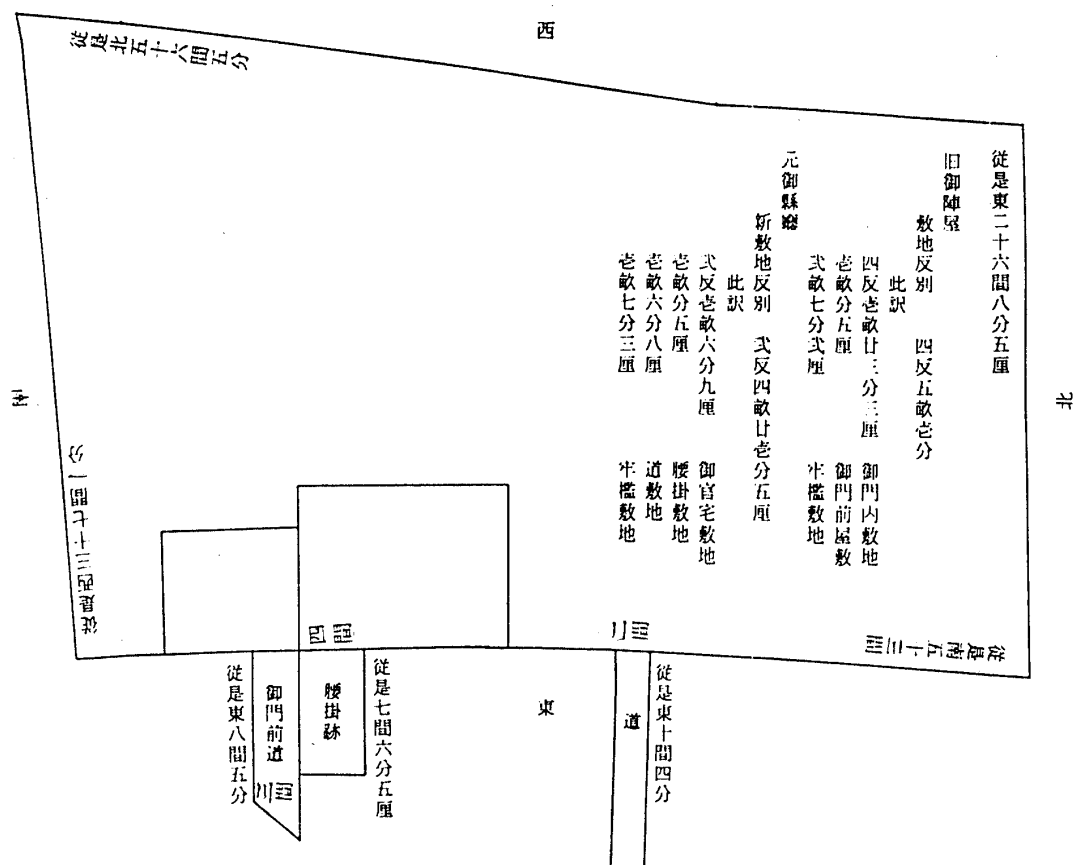
方の東辺中程に長屋門形式の南北に細長い建物（B棟）がみられる。これは東から陣屋へのアプローチ道の正面に位置している。このほか北寄りとA棟の後方、西奥にもそれぞれ1棟ずつ建物がある（C棟とD棟）。これら4棟は規模も大きめであり、陣屋を構成する主要な建物とみなせる。寛延元年再営時の『御陣屋御普請諸入用勘定目録帳』に対照させると、A棟は最も中心となる「御本陣御用場」、B棟は陣屋の正門も兼ねる「御門長屋」、そしてC棟とD棟はそれぞれ「北長屋」と「西長屋」にあたり、役人用の住居である（註8）。

このほかにはA棟の南に「土蔵」、南西隅には「稲荷堂」があり、B棟の西側の南と北にはそれぞれ「小屋」と記された小さな建物もみられる。

（2）敷地の拡張とその実態

先にも触れたが、『本保町有史料』のなかに旧陣屋と元県庁の敷地反別やその内訳が記された1枚の敷地図がある（図－3）。この記述を坪数に換算してまとめたのが表－1である。

旧陣屋の敷地は「御門前屋敷」や「牢檻敷地」を含めて1,351坪である。『陣屋絵図』に記されている「敷地惣坪数千五百歩」よりは150坪ほど少なめであるが、全体の約93%を占める「御門内敷地」（1253.3坪）が図－2において建物がたっている方形の敷地をさすのみでよい。「御門前屋敷」（30.5坪）は、屋敷とあるものの絵図に対照させると、陣屋の正門（「御門長屋」）にいたる東側のアプローチ道をさすものと考えられる。なお「牢檻敷地」（67.2坪）は陣屋よりも東方の村はずれにあった（註9）。



図－3 敷地図（本保町有史料）

表-1 陣屋と県庁の敷地坪数(図-3より坪に換算して作成した)

旧 陣 屋		元 県 庁	
敷地反別	1 3 5 1 坪	新敷地反別	7 4 1 . 5 坪
(内訳)		(内訳)	
御門内敷地	1 2 5 3 . 3 坪	御官宅敷地	6 3 6 . 9 坪
御門前屋敷	3 0 . 5 坪	腰掛敷地	3 0 . 5 坪
牢檻敷地	6 7 . 2 坪	道敷地	3 6 . 8 坪
		牢檻敷地	3 7 . 3 坪

いっぽう県庁の敷地は、「御官宅敷地」と「御腰掛敷地」、「道敷地」、「牢檻敷地」を含めて741.5坪とあるが、「新敷地反別」とあるから、この坪数は県庁開設にともなって新たに拡張した増加分とみなせる。したがってこれに旧陣屋の1,351坪を加えた2,092.5坪が県庁の総敷地面積となる。この坪数は後掲した県庁開設に関する記録にある「総坪数貳千九拾坪余」とも合ってくる。したがって県庁への整備にともない、敷地の総面積は陣屋時代より1.5倍ほど拡大したことになる。

県庁の敷地が旧陣屋より広がっていることは『県庁之図』と『陣屋絵図』を比べてみても明白であろう。そして両図の比較から敷地の大きな変化として次の3点を指摘できる。

- ①旧陣屋の敷地を含んでその北側に大きく広げたこと
- ②正門へ通じる「御門前道」の北側に隣接して「腰掛敷地」を設けたこと。
- ③「御門前道」から北へ8間ほどのところに新たに道をつけたこと

まず①についてみると、旧陣屋の敷地は上にも述べたように、北東の一画が欠けているものの、東西(南辺)が42間、南北が40間(西辺)ほどで正方形に近い。これに対して県庁の敷地は南北に細長い形状になっている。そして図-3をみると、東西は37間1分(南辺)と27間弱(北辺)、南北は56間5分(西辺)、53間(東辺)であり、旧陣屋と比べて東西方向が南辺で5間ほど短かく、南北方向は逆に13~15間ほど長くなっている。

後述するように旧陣屋の建物のうち、中心建物であるA棟と表正面に位置するB棟は増改築の手を加えられながら県庁の建物として再利用されたとみることができ、これらの位置も動いていないと思われる。したがって南辺で5間ほど短くなっていることは疑問であるが、旧陣屋の敷地はほぼ県庁敷地の南半部にそっくり含まれていると考えることができよう。そして北半部の長さにして13~15間分ほどが新たに拡張された敷地となる。このように推察すると、表-1において県庁の新敷地(741.5坪)の86%を占めている「御官宅敷地」(636.9坪)をこの北半部にあてることができ、ここにたつ3棟の建物(a、b、c)を官舎とみなした先の想定とも合ってくる。

つぎに②についてみる。『県庁之図』をみると、正門に通じる「御門前道」の北に接して「腰掛」と記された矩形の敷地がある。これに相当するものは『陣屋絵図』にはなく、この部分も新設の敷地とみなせる。しかも図-3によると、この大きさは東西が7間6分5厘、南北が4間で、

坪数は30.6坪になり、坪数の点でも表-1に新敷地としてある「腰掛敷地」(30.5坪)に近似している。

③についても同様にみると、『県庁之図』には陣屋時代からみられる「御門前道」とは別にそれから北へ8間ほど離れた位置に「通用門」に通じる1筋のアプローチ道がある。この道は北へ新たに広げられた部分につながっていることから新設であることは疑いなく、表-1の「道敷地」(36.8坪)に比定できる。ただし道幅は2間、長さは10間4分であり、坪数は20.8坪となって、表-1の「道敷地」と16坪ほど違っている（註10）。

（3）建物について

前項に述べた県庁の各建物のうち、官舎とみられるc棟、d棟、e棟は、『陣屋絵図』の建物のなかに類似した平面をもつものはみあたらない。そして新たに拡張された敷地にたっていることから、これら3棟が県庁開設に際して新たに造られた建物であると判断できる。後掲の記録の「官員住宅向と牢屋共、新規取建候間」もこれら3棟の新築を裏付けている。これらのほか西奥にある「御蔵」や東辺北よりにたつ「通用門」も陣屋時代の建物のなかには比定できるものがなく、新造建物と判断できる。

いっぽう県庁の建物のなかで陣屋時代の建物と関連がうかがえるのはa棟とb棟である。ともに南半の旧陣屋の敷地にあたる位置にあることに加え、両者の位置関係や平面形式の点でも可能性が強い。すなわち『陣屋絵図』に対照させると、a棟はA棟（「御本陣御用場」）、b棟はB棟（御門長屋）にそれぞれ対比できる。そこでこれらの平面を同じ縮尺で書き起こし、aとA、bとBの間取りを重ね合わせてみたのがそれぞれ図-4と図-5である。

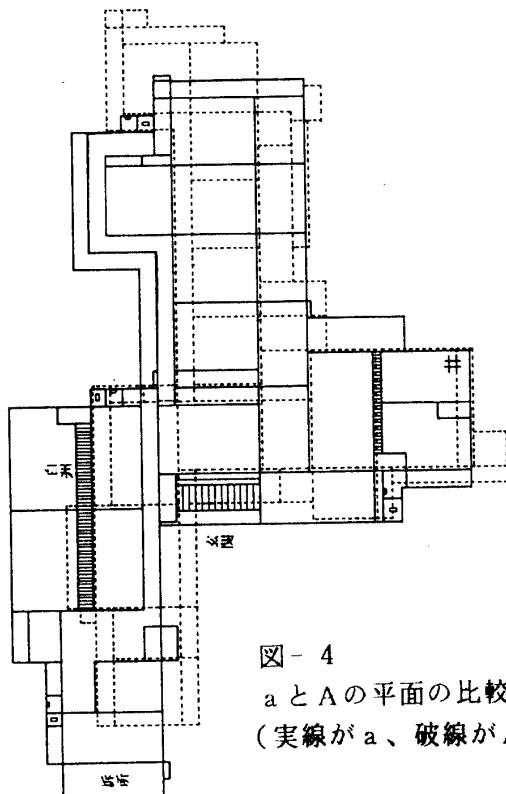


図-4
aとAの平面の比較
(実線がa、破線がA)

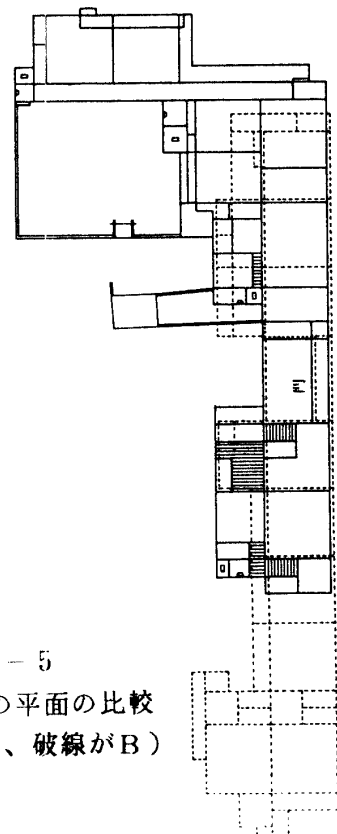


図-5
bとBの平面の比較
(実線がb、破線がB)

まずa棟とA棟はともに東、北、西の3方向に延びた複雑な平面形式をもっていて、一見すれば似通っている。ところが平面を重ね合わせてみると、図-4にみるように部屋割がほぼ一致しているのは北に延びる部分（「御本陣御用場」において土間や台所などからなる御用場部分）だけである。西に延びる部分はaでは10畳間が連なるのにAでは8畳間が続き、その南に張り出す8畳間の取り付く位置も違っている。また東へ延びる部分も部屋割のほか、「白洲」の場所も異なっている。

b棟とB棟はともに東辺に取り付き、中程に出入りの門を構えていて、それぞれ県庁と陣屋の正門として機能していたことがわかる。B棟は南北に20間もある細長い平面をもち、門の北側より南側に多くの部屋が続くのに対して、b棟は南北15間となり、しかも門より北側の方がむしろ充実した室構成をもっていて、一見しただけでは別の建物との印象を受けかねない。ところが最も重要視すべき門はともに間口が2間半で同じであり、これを基準に重ね合わせると、門からそれぞれ南と北へ続く2室分は部屋割もほぼ一致している。

以上のようにa棟とA棟、b棟とB棟は平面構成の点ではそれぞれ部分的に合致しているにだけであり、これだけで同一建物であるかどうか即断することはできない。しかし県庁開設にともなう記録には次のようにある（註11）。

「今般県庁御取建相成候ニ付、旧陣屋敷地茂、牢屋地其外新規囲込敷地共、総坪数貳千九拾坪余之地所御買上之上、庁内模様ハ訴所腰掛等、建継致し、官員住宅向と牢屋共、新規取建候間、右口々諸人用取調候処、今金四千百四兩程ニ有之（後略）」

これによると、新築されたのは「官員住宅」（官舎）と「牢屋」（牢檻）であり、増築も「訴所」と「腰掛」などが記されているに過ぎない。かりにこれらよりも重要で、中心的庁舎である政庁（a棟）や正門（b棟）が新築されたり、増改築されていたならばこのなかに必ず明記されたはずである。したがって平面構成ではそれぞれ部分的に合致するだけであるが、『県庁之図』にみられるa棟とb棟は陣屋時代のA棟、B棟をそれぞれ引き継いで再利用したものとみるほうが妥当と考えられる。特にa棟とA棟が、3方向に張り出すという特異な平面を同じようにもっていることなどは、両者の関連を強くうかがわせるものといえる。

なお平面が部分的にしか合致しない根拠については今のところは推測の域をでないが、ひとつには『陣屋絵図』（天明～寛政頃）から『県庁之図』（明治初頭）までの120余年の間における改変、あるいは両図の記載の間違いなどに起因するのではないだろうか。

このほかではa棟の南側にある「土蔵」は2間×3間の規模をもち、『陣屋絵図』のA棟の南にみられる「土蔵」と同じ規模である。位置的にはすこし移動したことも考えられるが、これも陣屋時代のものを引き継いだ可能性も考えられる。

（4）そのほかの変更

表-1の県庁新敷地のなかには「牢檻敷地」（37.3坪）が含まれている。先の記録によると県庁開設にともない「牢屋」は新設されている。その所在地は「四軒町」であるが、『本保町有史料』の『牢檻敷地図』によると、敷地の坪数を104坪余と算定できる（註12）。これは陣屋時代の

「牢檻敷地」（62.7坪）と県庁開設時の新敷地（37.3坪）を合わせたものに近い数値である。したがって県庁開設時の「牢檻敷地」もやはり陣屋時代の敷地を受け継ぎながら拡張して整備されたことが指摘できる。

また県庁敷地の周囲に廻らされた堀については、『陣屋絵図』には描かれていないが、先掲の勘定目録帳によると、幅4尺、深さ5尺の惣堀が造られたことがわかり、陣屋時代も周囲に堀があったことになる。したがって県庁の堀も陣屋時代のものを生かしながら拡張部分にもひろげていったものと思われる。なお南半部の東側には今でも堀の一部分が残っている。ただしこの堀沿いの道については陣屋の頃からあったのかどうかはわからない。

4）結 語

このほど新たにみつかった河野治郎氏所有の『本保縣廳之図』にもとづいてこれまで具体像がわからなかった本保県庁の敷地や建物の実態および旧本保陣屋との関連について検討してきた。

本保県庁の敷地や建物は図-2に示す通りであり、敷地は東西が南辺で37間余、北辺で27間弱、南北が56間5分（西辺）、53間（東辺）で、南北に細長く、堀に囲われた部分だけで1893余坪の広さがあった。また正門と「通用門」に通じるそれぞれ幅3間、幅2間のアプローチ道があり、前者には北に接して腰掛用の敷地も設けられていた。さらに「四軒町」にあった「牢檻敷地」（104.5坪）も含めると、本保県庁が管轄していた敷地の総面積は2092.5坪に及んでいた。

庁舎の建物としては東辺南よりに正門を構え、それから西の、南半部のほぼ中央に中心建物である政庁があり、北半部には3棟の官舎が並んでいた。このほか西奥には「御蔵」が、政庁の南には「土蔵」があり、東辺の北半部には官舎用の「通用門」が設けられていた。

またこの本保県庁は江戸時代の本保陣屋を引き継いだものであるが、敷地は旧陣屋の分をほぼそっくり含みながらも、それから北へ大きく拡張しており、陣屋時代の1.5倍ほどになっている。そして建物については政庁と正門はそれぞれ陣屋時代の「御本陣御用場」と「御門長屋」を改造したり、増築しながら再利用したと判断され、本館の南にある「土蔵」も陣屋時代のものを引き継いだ可能性がある。しかし3棟の官舎や「通用門」、「牢檻」などは県庁開設に際して新たに造られたものであることなども指摘できた。

（ 註 ）

- 1) 本保陣屋の歴史的変遷については『武生市史 概説編』（昭和51年）をおもに参考にした。
- 2) 吉田純一・関 豊「本保陣屋の調査研究（1）～（5）」日本建築学会大会および同北陸支部大会で報告している。昭和63～平成元年
- 3) 武生市や鯖江市の周辺地域に陣屋から移したと伝わる建物が数棟ある。註2に掲げた論文のうち、「本保陣屋の調査研究（2）旧日庭寺本堂について」および「同（4）中出家住宅について」はこうした遺構調査の報告であり、現在のところ、武生市広瀬町にある中出家住宅が陣屋の遺構であることを確認している。
- 4) この図は福井県立博物館・第13回特別展『文明開花の光と影 福井県/その誕生期』（1990-9/28～11/4）において出典された。

- 5) 道幅は図-3を参照した
- 6) 表-1において旧陣屋の「御門内敷地」1253.3坪と元県庁の「御官宅敷地」636.9坪を加算して求めた。
- 7) 註2に掲げた論文のうち、「本保陣屋の調査研究(3)「陣屋絵図」について」日本建築学会大会学術講演梗概集(昭和63年10月)に詳しく報告している。
- 8) 註2に掲げた論文のうち、「本保陣屋の調査研究(1)陣屋の歴史と建物」日本建築学会北陸支部研究報告集 第31号(昭和63年6月)に詳しく報告している。
- 9) 『本保町有史料』のなかの村絵図などから陣屋の東方の村はずれに「牢屋」が設けられていたことが確かめられる。
- 10) 図-3において 道の幅と長さから求められる坪数と注記の坪数が一致しない理由はわからない。
- 11) 註1に掲げた『武生市史 概説編』にこの記録が掲載されている。同書には「武生市立図書館蔵」とあるが、原本は現在、所在がわからず、原本に対照することはできなかった。
- 12) 『牢檻敷地図』に記されている敷地の大きさは、東西が10間4分8厘と13間5分7厘、南北が6間7分2厘と8間1分7厘であり、東北が一部欠け、東南は逆に2間1尺×1間張り出している。こうした寸法をもとに図形的に面積を算出した。

※謝辞 斎藤嘉造氏(武生市)には河野治郎氏所有の『本保縣廳之図』の所在をご教示いただき、笠松雅弘氏(福井県立博物館学芸課)には特別展の準備であわただしいなか、図の撮影の便宜をお計りいただいた。末尾ながら深く感謝申し上げる次第である。

(平成2年12月19日 受理)